

蒼海城について

茂木 渉

はじめに

蒼海（おおみ）城は、前橋市元総社町に存在し、その城域は上野国府跡と重なり合い、かつては府中として、又守護代長尾氏の城下町として栄えていた。つい30年ほど前までは各所に濠址などを残していたが、現在ではほとんどが失われてしまい、本丸付近にわずかにかつての面影をとどめているにすぎない。この失われてしまった城郭について、その歴史及び構造についてすこし考察してみたい。

1. 蒼海城と国府

蒼海城がいつ築城されたかははっきりしない。良質の資料ではないが、江戸時代に釈迦尊寺住職釈泰亮の著した「上毛伝説雑記拾遺」(注1)の中の『総社記、下』に「長元戊辰年六月、上総介平忠常下総国より引移らる。其嫡子下総介常重、其の長子千葉介常胤、此の時城鎮護の為に、五智の如来を城の四方に数箇寺を建立有って安置す。或は再造宮有り。」とあり、長元元年(1028)に平忠常が下総国から移り、その子常重と孫の常胤が「城」鎮護の為に数寺建立したり再建したりしている。

江戸時代の資料なので「城」としているが、これは城郭というより「館」の可能性が高い。或いは、国府を城としてとらえていたのであろうか。(注2)

上総介の一族は栄えていたが、治承四年九月十三日源頼朝からの加勢の依頼により一族を率いて鎌倉へ赴いた。その隙をついて、平家方の足利俊綱(藤姓)が足利よりこまで来襲し府中の民家を焼き払った。吾妻鏡治承四年九月三十日の条に「(前略)足利太郎俊綱が平家方、焼払同国府中民居、是源家輩令居住之故也」とあるが、この時国府や館も焼かれた可能性がある。

建久三年(1192)七月、上総介一族は加勢の功により下総国へ移ったが、一部はこの付近に土着していった。建久五年(1195)十二月一日、安達盛長が上野国奉行になったが、高崎市八幡原町に館を構えたので蒼海の地はそれほど大きな変化がなかったであろう。安達氏は、弘安八年(1285)の霜月騒動で滅亡するまで八幡原に居住し、蒼海には進出しなかったようだ。鎌倉幕府滅亡時の上野守護は長崎孫四郎左衛門尉だったか、どこに居住したかは不明。

2. 長尾氏の登場

鎌倉幕府が滅亡し、南北朝、室町幕府と移っていく中で、長尾氏が上杉氏の家宰として、又上野国守護代として登場してくる。長尾氏がいつ上野へ入部したかは定かではないが、建武四年(1337)足利直義が上杉憲顕に上野国に向かうよう命じた時、(注3)上杉氏に従って来たといわれている。

観応二年(1351)十二月、観応の擾乱の笠懸野、那波庄の合戦には、足利直義方の桃井直常の先鋒として長尾孫六忠房と同平三(忠房の弟)、長尾左衛門の名が見えるので(太平記)この頃には蒼海に入部していたと考えてよいだろう。貞治二年(1363)に上杉憲顕が関東管領に還補(直義方だった為、一時宇都宮氏綱が補任されていた)され、上野、武蔵、越後の守護職も兼務したが、長尾氏も上野、越後の守護代となった。この時の長尾氏は景忠で、これ以降上野長尾、越後長尾に分かれる。上野長尾はさらに総社長尾と白井長尾に分かれ、前者は蒼海城、後者は白井城を拠点としていく。総社長尾氏は、上野守護代はもとより武蔵守護代に任じられた者もあり、又上杉氏の家宰をつとめている者も多く大いに栄えた。(注4)

3. 蒼海築城

さて、蒼海城の築城はいつであろうか。蒼海城主として初めて記録に出てくるのは景行(この名は長尾系図にはない)で「永享元年蒼海城へ移る。時に城郭を修造す。同十年子息忠房後賢督奉行にて、平井の城を修造す」(総社記)とある。この記述で注目すべきことは、景行が永享元年(1429)蒼海城へ移ったということだ。

室町幕府になってからも関東では戦乱が続いたので、有力な武士は簡単な城(或いは強化された館)を築いたと考えられる。とくに総社長尾氏は、上野武士の中心的存在であり、府中に居を構えていたので国府の一部を屋敷(館)化し、それを集合して城郭としたのであろう。

長尾忠房は、当時太田道灌とならんで築城家の双璧とされ、平井城、白井城等は彼の手になるものといわれている。永享元年(1429)の蒼海城の修造も彼が手を加えたと思われる。修造の目的は、蒼海城の防衛力を強化することが目的で、染谷川と牛池川をそれぞれ何箇所かつ堰き止め水を湛え、立地条件の悪さを補おうとした。このような川を堰き止めて要害とする手法は、平井城や多比良新堀城(吉井町)に今でも痕跡を見ることができるが、それ等は山内上杉氏の勢力下にあり長尾氏が指導したものであろう。

永享十年(1438)足利持氏が永享の乱を起こし、それが結城合戦(永享十二年)へと続いていくが、これ等の戦闘を通して、とくに結城城の攻防を体験した武士は、長期戦に堪えうる城郭の必要性を認識し「関東における築城の一時代」(山崎一氏)を出現させた。この築城技術の急速な発展の中で、蒼海城の改修の限界を認識した忠房は、石倉城(厩橋城の前身)を築いていく。理由としては「永享の頃より蒼海に用水不足故、是非なく城を石倉に移し」(総社記)と用水不足をあげている。しかし、修造してそれ程経っていないにもかかわらず太田道灌を招き石倉(利根川左岸)に築城していったのは何故か。

その理由としては、

(1) 染谷川と牛池川の水が涸れ始めた。蒼海城は両川を土俵で堰き止め水を湛えて防御を強化しているが、それが唯一の要害といってよく、これが無くなれば平地の城なので攻められればとたまりもない。生

活用水も不足したであろう。

- (2) 永享の頃は国衙(国府)は有名無実化していて、ここに居住する意味が無くなってしまった。それよりも水運等を考え石倉の方が交通の要衝になりうる(石倉城はそのため運河まで開削した)。
- (3) 城郭の急速な発展の中で、旧式の縄張りの弱点がさらけ出されてしまい、もはや改修する意味のない城になってしまった。等々考えられる。

総社長尾氏は、忠房―忠綱―忠政―景棟―忠景―顯忠―顯方と続き、石倉長尾氏は忠房の子の景道から景善―景忠(賢忠)と続く。石倉城は、享祿から天文の頃の利根川の相次ぐ氾濫や流路変更で大部分が崩壊していき、賢忠は残った三の丸を基礎に新しい石倉城を築いた。これが後の厩橋城で、その後長野氏が城主となっていく。

4. 蒼海城の攻防

さて、忠房は石倉城を築いて移っていったが、総社長尾氏は引続き蒼海城にとどまっていた。

文明十八年(1486)の堯恵の北国紀行(注5)に「神無月廿日あまりに。彼国府長野の陣所に至る時。晡時になれり。此野は秋の霜を争ひし戦場未だ払はずして。軍兵野にみりて枯れたる萩われもかうなど引き結びて夜を重ねぬ。定昌の指南によりて。藤原顯定長景の旅。哀の心ありて。旅宿を東陣にうつされし後は。嚴霜ををだやかなり。平顯忠長景。陣所にて会。」とあり、長野氏が国府(蒼海)へ出陣し、(注6)それに対し長尾氏は越後守護上杉定昌、上野、武蔵の守護で関東管領の上杉顯定を待み対陣しているのがよくわかる。すでに長尾氏単独では長野氏に対抗できる力は無くなっていった。

翌長亨元年(1487)十一月には長尾兵五(定明)は越後勢とともに勸農城(足利市)を攻撃しているのが、(注7)長野氏とは和睦したのであろう。又、守護代として大永二年(1522)室田長年寺の禁制も出している。(注8)

しかし、その状態は長く続かなかったようで、大永五年(1525)長尾顯方が北条氏に通じた為、再び長野氏に攻められることになった。大永7年(1527)には厩橋城主長野方業(厩橋宮内大夫)が東から攻めたので、東西両側から挟み撃ちにあうこととなり「長野左衛門大夫色々廻計儀、顯景一類以可為滅亡分」(注9)という状況で、越後の長尾為景に白井の長尾景誠がそれに添えた書状の中で「総社要害可乗取行」、「来春有御越山被引立候者」(注10)とを懇願している。

享祿三年(1530)長野左衛門大夫信業(憲業)は吾妻で戦死し、業政の代になり山内上杉氏の家宰は長野氏に移った。その後も総社長尾氏は、蒼海城とともに存続していくが、(注11)永祿の頃になると武田氏が西上野へ侵攻して来るようになり、その脅威にさらされることとなる。永祿五年九月十八日信玄が宇都宮広綱に送った書状に「今度上州へ及行箕輪惣社倉賀野郷村悉撃碎」(注12)とあり、蒼海城も攻撃目標にしているのがわかる。

永祿七年六月には倉賀野が落城した。(注13)蒼海落城がいつかは明らかではないが、信玄の意図は倉賀野城を落とし箕輪と厩橋との間を分断するため蒼海城を攻略する必要があるのでは、箕輪落城以前ということになる。永祿八年二月に信玄は、諏訪上社に捧げた祈願文の中で再度惣社攻略を祈願し、(注14)同年同月蒼海城の北五キロの三ノ宮に進出した。そして漆原城に駐兵し、(注15)利根川の渡河点を押さえた。永祿日記によると「昨廿五者三ノ宮陣ヲ払、惣社口へ敵相動ト委書シマス」(注16)とあり、蒼海城攻撃に向かったと考えられる。

この後、蒼海城関係についての記録が無いので落城の時期は明らかではないが、ほどなくして落城したのであろう。落城時に長尾氏の家臣の瀬下豊後守(瀬下屋敷に居住していたのであろうか)は、武田方に内通している。(注17)

5. その後の蒼海城

武田氏は、蒼海城を利用せず厩橋城への押さえとして新たに石倉砦(利根川右岸)を築いた。以後、この付近の歴史は厩橋城と石倉城の攻防になっていく。

その後、北条氏(注18)を経て天正十八年(1590)十一月、諏訪頼忠が蒼海に封ぜられたが、この城を改修せず東北部に長屋を建てて居住した。諏訪氏が高島城(諏訪市)に移ってから慶長六年上総国より秋元長朝が封ぜられたが、秋元氏もこの城の改修を断念し、牛池川の東に八日市場城を築いて仮住まいしながら総社城を築き移り、その後蒼海城は廃墟となった。

6. 蒼海城の構造

次に蒼海城の構造(縄張り)について、すこし見ていく。

蒼海城は、県内に多数存在する城郭の中であって、きわめて特異な構造をしている。ほとんどの城郭は戦国期に築かれたり改修されたりしているが、この城の中心部はあまり改修されていず城郭の古い形態を残し、築城史を考える上で有効な資料を提供してくれる。蒼海城は、染谷川と牛池川とに挟まれた所に占地し、両川に幾つかの堰止めを築き(古図には一番堰、二番堰等表記してある)水を湛えて最外防衛線とした。その中に、縦横の濠が基盤目状に走っている。本丸は北に偏し、その南に二の丸が並びその周辺の各郭には松井屋敷、瀬下屋敷、鎌田屋敷、讃岐屋敷等の名称が残っている。これら各郭が縦横に配置されているので、山崎一氏はこういう形式を「列郭式」と呼んでいる。(注19) この城を注意して観察してみると、戦国期の城郭のように本丸を中心として各郭を有機的に配置していくような形と異なり、郭配置に統一性が感じられない。例えば城の西側に沼があるが、この外側(西)に清徳寺と讃岐屋敷があり各郭から孤立している。こういう

蒼海城



图1 蒼海城 山崎訥氏提供

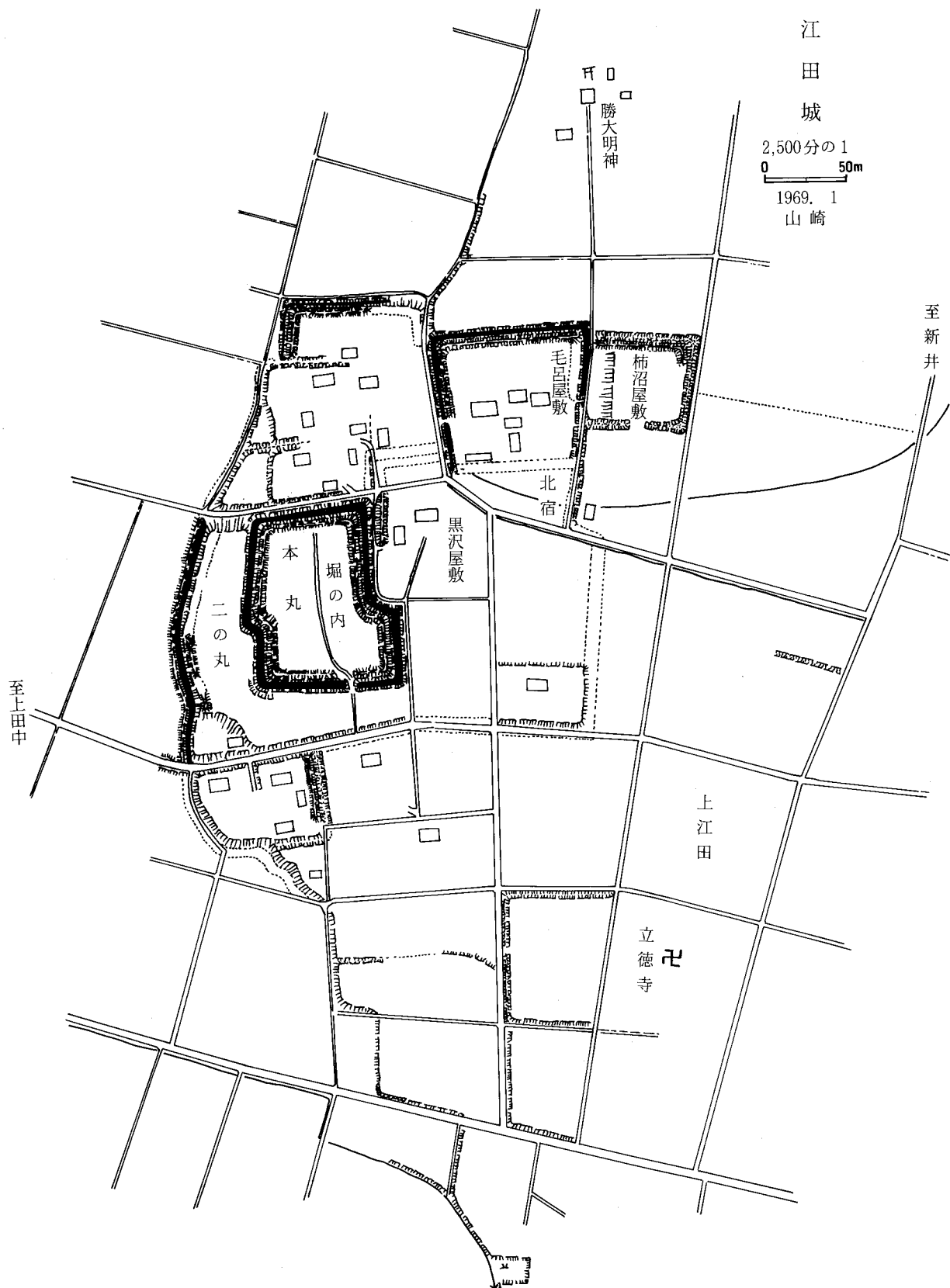


図2 江田城 山崎詔氏提供

配置は、かえって敵に占領され易く、それが攻城軍の足がかりとなってしまう、弱点を形成してしまう。また北西方面には工事が少なく、外部との遮断が不十分である。

長尾氏は上野守護代であったから、付近には一族、郎党、被官が集住していたはずだが、(注20) 数個の武家屋敷(館)の密集した所ではそれ等を濠をもって連ね自然発生的に城郭を形成していった。当然、城郭化していく時にはそれなりの計画的な工事もしていく。永享元年(1429)に景行が城を修造したというのは、こういったことであつたろう。各郭が○●屋敷と呼ばれているのは、そのことを表している。本丸は長尾氏当主の屋敷(館)であつたろう。

このような例を、新田町の江田城にも見ることができる。この城にも各郭に黒沢屋敷や毛呂屋敷等の名称が残っている。特に本丸東側にある黒沢屋敷の土居は、本丸堀を挟んで本丸土居と相對していて、この城の性格をよく表している。蒼海城のように碁盤目状の郭配置でないのは、ここが国府ではなかったからである。

蒼海城は方形の屋敷を連ねているので碁盤目状の濠となるが、城郭の堀は決して交点が十文字にはならずT字形になっている。これは相互の側防を考慮してのことである。城郭は時代が下がるほど本丸を中心に各郭を配置し、有機的にそれを結びつける構成となっていくが、列郭式の城郭は、各屋敷の集合のため各郭(屋敷)の独立性が高く、一部が敵に占拠されても他への影響が少ないという利点をもつ反面、各郭の連絡が容易でなく又主従があいまいで兵力の転用や重点的配置が困難なため、守備に大兵力を必要としたり各郭間相互支援が出来にくい等不利な面が大である。つまり、こういう形式の城郭は籠城戦の効果を半減させてしまうことになる。

この形式の城郭は、早い時期に築かれたもので、戦国期の比較的早い時期に勢力をもっていた長尾氏、那波氏、岩松氏等の勢力下にその類似をみることができる。急速に発展していく城郭の中で蒼海城は旧式化していき、それが石倉城の築城となっていく。

おわりに

蒼海城についてふれてみたが、まだまだ不明な部分が多い。そして、それが解明されないうちに遺構がほとんど消滅してしまった。残念というほかない。しかし、近年の数度にわたる発掘調査により、いくつかの中世の遺構が出土していて少しずつ資料も増えている。これ等の新発見によってさらに蒼海城の研究が深まれば幸いである。

注

- (1) 上野志料集成収録
- (2) 近年の発掘調査によると、推定国府域の北と東を限る堀が出土しているが検討を要する。
又、吾妻鑑では城と館を使い分けている。
前橋市教育委員会 昭61、閑泉明神北遺跡、昭58、閑泉樋遺跡、寺田遺跡
- (3) 群馬県史 資料編6 中世2 No.768 足利直義書状、上杉家文書
- (4) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 上野国分僧寺尼寺中間地域
この調査で長尾家関連のものと思われる三カ所の館址や寺院址が出土。
また、応永一七年(1410) 銘の妙見寺梵鐘も「長尾左金吾平朝臣憲明」の銘がある。
- (5) 群書類従 卷第三三九
- (6) 長野氏が出陣した理由は、扇ヶ谷、山の内両上杉の内紛により山の内方だった総社長尾氏と闘うため。
- (7) 群馬県史 資料編7 中世3 No.1789~1792 赤堀文書
- (8) 同 上 資料編7 中世3 No.1939 平某禁制写 長年寺文書
- (9) 同 上 資料編7 中世3 No.1958 長尾顯景書状 上杉文書
- (10) 同 上 資料編7 中世3 No.1959 長尾景誠書状 上杉家文書
- (11) 同 上 資料編7 中世3 No.2122 関東幕注文の中に「惣社衆」がみえる
- (12) 同 上 資料編7 中世3 No.2173 武田信玄書状
- (13) 井上文書 (吉井町 井上氏蔵)
黒沢文書 (藤岡市下日野黒沢氏蔵)ともに永禄七年六月二日付信玄からの感状である。
- (14) 群馬県史 資料編7 中世3 No.2270 武田信玄願文
- (15) 漆原文書 年号が入っていないが、この時ここに原胤重を置いたと考えられる。
定 漆原之地其方□□境日之事候之
間其表為指引給直判候弥可抽忠節者也
仍如件
永禄□年三月廿八日
原 孫次郎殿
- (16) 群馬県史 資料編5 中世1 永禄日記
- (17) 群馬県史 資料編7 中世3 No.2362
- (18) 上毛故城墨記には「下野の榎本の城主近藤出羽介実方之を領す。」とある。
- (19) 群馬県古城墨記の研究 上 昭46 山崎 一 著
- (20) 同 上 には蒼海周辺にいくつか城館が載っている。
又、国分僧寺・尼寺の中間地域の発掘で城館が出土している。